

事故データの見方 読み方 考え方(7)高齢期の事故 なぜ、男女はかくも違うのか(2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 吉田, 信彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/512

事故データの見方読み方考え方

高齢期の事故

なぜ、男女はかくも違うのか(2)

東北学院大学教養学部教授

吉田 信彌

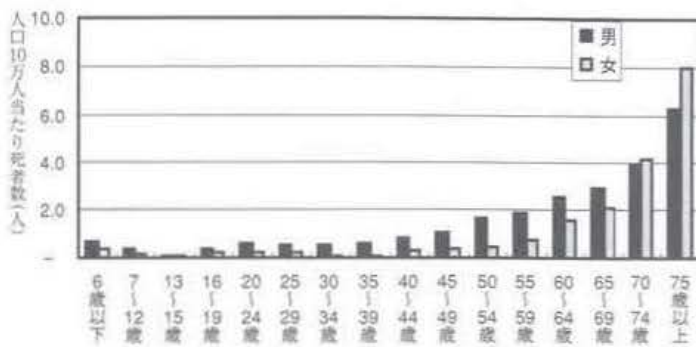


図1. 人口10万人当たりの歩行中死者の発生率(平成18年)
〔交通統計 平成18年版〕交通事故総合分析センター (ITARDA)

歩行中事故の男女差

高齢化すると男女は逆転する

歩行中事故による死者および負傷者の発生率の男女差は年齢によって高低が逆転することを前号で指摘した。その図1と図2を再掲載する。

子供(十二歳以下)は、男子のほうが女子よりも死亡も負傷も多いのに、高齢化すると女性のほうが上回る。元気なほうが事故に遭いやすいと納得しそうだ、高齢の女性が元気といっても、男児のように走り回るわけではない。元気が元凶というのは着眼点としてはわるくないが、まだ浅い面がある。心身の成長の段階を追って、男女差の逆転の背後に

あるものを考えてみよう。

子供の歩行者事故

十二歳以下の小学生以下では男子のほうが女子よりも明らかに事故に遭いやすい。男らしく、女らしくという観念は薄れてきた昨今ではあるが、男の子と女の子の両方を育てた親たちの多くは活動性には差があった、というのが実感だろう。

この子供の時期の男女差は大きいのだが、十三歳以降の中学と高校の時期には、その男女差が一気に縮小する。図2の平成十八年のデータでは負傷者は女子のほうの発生率が高いが、毎年女子のほうが高いとはか

ぎらない。しかし、中高生の男女の差が小さいことは変わらない傾向である。そして、歩行事故だけでなく、自転車についても同様の傾向がある。

中高時代はもっとも男女の差を意識する頃なのに、事故統計では男女差が縮小するのは奇妙に思えないだろうか。その点についてはまた機会を改めて考えてみたい。

成人期の男女差には

お酒がからむ

二十歳以降の成人期から高齢期まで、男性のほうが女性よりも歩行者事故は多い。図の平成十八年にかぎらない傾向である。

この男女差はお酒のせいといえ



イラスト・ふじたとしお

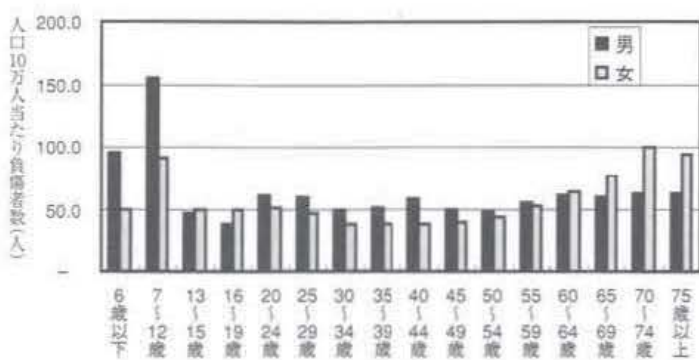
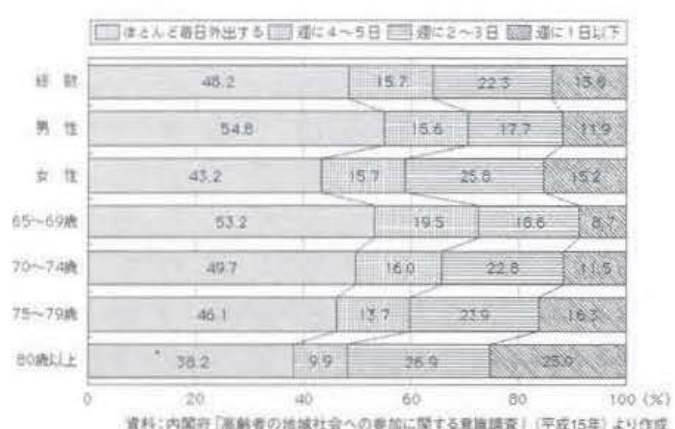


図2. 人口10万人当たりの歩行中負傷者の発生率(平成18年)
『交通統計 平成18年版』交通事故総合分析センター(ITARDA)



資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成15年)より作成

図3. 高齢者の外出状況『高齢社会白書 平成16年版』

る。歩行者が酔っていたかどうかはすべての事故で検証されるわけではないので、飲酒と歩行者事故の関係をデータとして明確に示せないが、男性の歩行者事故が夜に多いことがひとつの傍証になるだろう。

男性のほうが女性より夜に歩く機会が多いというのも成人期の男女差のひとつの説明になる。家族の世話をする女性は夜は家の中にいて出歩く機会が少ないという生活スタイルを思い描けば、それは一因として否

高齢期の男女差は外出頻度の差か?

その高齢期では女性のほうが歩行者事故は多くなる。女性のほうが多くなるという逆転の年齢は、死者と

定はできない。

お酒を飲んで夜に出歩くのは、最近では男性だけではなく若い女性も同じかもしれない。女性の勤め人が多くなれば、帰宅も夜の時間帯になるし、つきあいのお酒も多くなる。そこで、成人期の歩行者事故の男女差はだんだん縮まると予想できるだろう。

しかし、男女差は残るだろう。なぜなら、若い女性は飲酒をしても、用心深い。住居も独りで暗い歩道のない道を通るような場所を選ばない。そして、その防犯対策は歩行中の交通事故の予防策にもなるからである。

男性とお酒の縁はなかなか切れないものだが、高齢期になって、会社を定年退職すれば、つきあい酒からは解放される。高齢期には男性の歩行者事故は昼間のほうが多くなることとその裏づけである。成人期を終えたとお酒も卒業だが、しかし歩行者事故の発生率は高くなる。

負傷者で異なるし、年次によっても若干異なるが、高齢の女性のほうが男性より事故に遭いやすいことは間違いない。

これを高齢女性の活動性と結びつけたがる感情的な論がある。妻は自分を家に置き去りにして、外を出歩いていって高齢男性のやっかみの声が聞こえてくる。しかし、そうだろうか。

夫婦の間には年齢差があり、夫のほうが年長であることが多い。だから妻のほうが元気であってもおかしくはない。また、同じ年齢で比べる統計データでは、かならずしも女性のほうが外出する機会が多いとはいえない。

平成十五年の内閣府のアンケート調査(高齢社会白書 平成十六年版)によると、男性のほうがむしろ外出の頻度は高かった(図3)。

外出するから事故に遭うというなら、高齢期では男性と女性のどちらのほうが歩行中を含む交通事故全部の死者と負傷者が多いのだろうか。平成十八年を例にとるなら、人口十万人当たりの七十歳から七十四歳の男性の死者数一〇・八六人にに対し、女性は八・〇九人、負傷者は男性五

人、負傷者は男性五

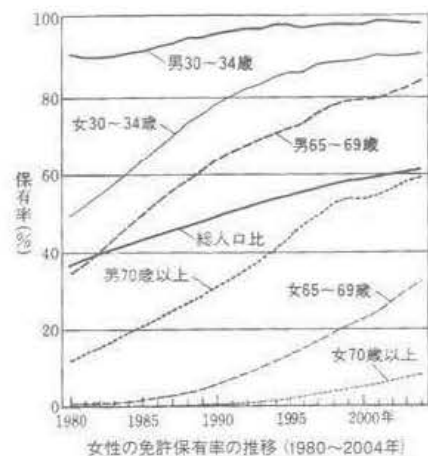


図4. 運転免許保有率の年次推移
吉田信彌「事故と心理」中公新書

七九・五人に対し女性は五二・五人であった。どの年齢でも交通事故全体では男性のほうが死者および負傷者の人口当たりの発生率が高い。したがって、高齢女性の外出機会が多いというのは当たらない。しかし、機会という着眼点が大事なことは次号で解説する予定である。

高齢期の男女差は 運転免許の有無の差

高齢者の事故の男女差を決定づけるのは免許保有率の差である、というのが私の見解である。図4は、免許保有率の年次推移を示したものである。高齢の女性の免許保有率が他の世代に比べ低いことがわかるだろう。この免許保有率の低さが歩行者事故に二重の影響を与える。

第一は、高齢の女性が外出するときの移動手段が徒歩になる点である。したがって歩行の機会が増える。それだけ歩行者として事故に遭う機会が増す。高齢の男性は自動車を運転するために、運転中に事故に遭う機会が増えるが、女性はたとえ外出

の機会が男性より少なくとも、歩行者として路上に出る機会が男性と同じかあるいはそれ以上ということもあり得る。男性と女性のどちらが歩行者である機会が多いかは確定できないが、免許をもたないと移動の手段は限定される。

そして、免許をもたないことの一番の影響は運転者の行動特性を理解できない点である。クルマがどう動くかの予測がつきにくい。自分のどのような行動がどう影響を与えるかの見当もつかないから、運転者からみると予想外の行動をとる。そのため高齢女性の歩行中の事故の発生率が高くなる。

高齢の女性への対策を急げ

どれだけ高齢女性が危険であるかは図2をみてほしい。七十歳を超えた女性の負傷者の発生率は小学生（七歳から十二歳）の女兒と同じ高さである。

小学生と同じくらい高いと気づけば、保護する手立てを考えるのは当然ではないだろうか。登下校時に父兄が通学路の要所に立って学童を誘

導し保護する学校もある。それと同程度の力を入れた保護策をとってもよいのではないか。

その手間のかかりそうな保護策を永久に続けよう、というのではない。図4は、やがて高齢女性の免許保有率も高くなることを示す。免許保有率が高くなれば、歩行者事故は減少するだろう。今後何も特別の対策を打たなくとも、高齢女性の死者および負傷者の発生率は下がる、と私は予想する。

しかし、問題はその下がり方のスピードである。免許保有率の低い高齢期の女性は、車から自分を守る術を知らない。その現状にある今の彼女たちを事故から守ることが、ここ数年だけの特別対策として必要なのである。高齢期の歩行者事故のゆるやかな減少ではなく、迅速な人為的な介入の跡が統計にもみえるような減少を望む。

(よしだ・しんや)

文献

1. 「高齢社会白書 平成十六年版」
(<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2004/zenbun/html/G1243100.html>)
2. 吉田信彌「事故と心理」中公新書